

浄影寺慧遠『維摩經義記』の研究

——注釈の一特徴と分科——

菅 野 博 史

はじめに

浄影寺慧遠（五二一—五九二）の維摩經に対する注釈書『維摩經義記』⁽¹⁾を資料として、彼の經典注釈の特徴と維摩經の分科を考察することが本稿の課題である。注釈の特徴を説明するためには、さまざまな視点を設定しなければ、十分な成果を挙げることはできない。たとえば、地論宗南道派の学匠として、慧遠は、維摩經本文の解釈に、十地思想、心識論を持ち込むことがしばしばあるが、これなどはその注釈の思想的特徴といえよう。また、引用經論を調査することは、注釈者の学問的背景を

明らかにすることにつながり、重要な作業であるが、本書の場合、大乘涅槃經、菩薩地持經、十地經論からの引用が多く、なかでも涅槃經の引用が多い（およそ七十回）のには驚かされる。今、仮に挙げた二つのことが、維摩經の注釈に特殊なことなのか、他の經典を注釈する場合にも通じる一般的特徴なのかは、慧遠の他の經疏を検討しなければ結論は出せないであろう。また、以上のことは、經典注釈の方法的特徴についてであるが、經典本文の具体的な解釈内容の特徴についてであれば、他の維摩經注釈書との比較を経なければ説明できないことが多いことは言うまでもない。このように、一つの經疏を研

第一節 注釈の特徴

(一) 経文の語順の訂正

① 經典の冒頭におかれる「如是我聞」について、慧遠は、

温室經の初めに言く、「阿難曰く、吾れ仏より是の如きを聞く」と。故に知んぬ、仏の所説を名づけて如と爲し、仏の所説を善ひて、之れを以て是と爲す。但し方言同じからず。彼の温室經は此の語に順ず。是の故に先に、吾れ仏より聞くと善ひ、後に、聞く所の是の如きの法を出す。余經は多く外國人の語に順ず（大正藏本の懷を脚注によつて順に改める）。先に如是を挙げ、却に我聞と言ふ。⁽²⁾

と述べている。温室經の原文は「阿難曰、吾從仏聞如是」⁽³⁾であるが、慧遠の引用では「……吾從仏聞於如是」となっており、「如是」を体言として理解していることがわかるが、ここでは問題としない。問題は、鳩摩羅什の訳経以前の古訳にしばしば見られる「聞如是」の方が中国語文としては普通の語順であり、「如是我聞」は外

究する場合でも、同一注釈者の他の経疏と、同一經典の他の注釈書を視野にいれて研究しなければ十分な成果は望めないであろう。しかし、今、それだけの準備をしないまま、慧遠の注釈の特徴を議論することは軽率との譏りを受けるかもしれないが、本稿では注釈の特徴のなかでも、これまでほとんど注目されなかった視点に光をあてて考察したい。慧遠の『維摩經義記』を読むと、彼が維摩經の本文を語学的に正確に理解しようとした心がけていることに気付く。それは、漢訳仏典という翻訳文と中国語文との語順の相違についての指摘や、經典の一字字を取り出して訓詁を示すことや、經典の中の「雖」「亦」「但」等の助辭がなぜそこに使用されているのかを文脈に即して説明すること、等にあらわれている。筆者は、これまで南北朝時代・隋代の經典注釈書を研究してきたが、今、挙げたことは、他に見られない慧遠の大きな特徴といつてもよいのではないかと考える。そこで、第一節ではこの点を中心として考察し、第二節では、慧遠の維摩經觀を解明する第一の手續きとして、經典の分科について整理する。

国語、すなわち梵語の語法にしたがった語順であるという指摘である。この指摘は妥当であると思う。

② 語順の問題ではないが、仏教經典冒頭の定型句である「如是我聞一時仏住……」の「一時」の解釈について次のような問答を記している。すなわち、

云何んが一時は後（大正藏本の復を脚注によつて後に改める）に従ひ、是れ前に属するには非ずと知ることを得んや。地經に準依する。所以に知るを得。華嚴大本の十地品の初めに云く、爾の時、仏、天の中に在り、と。龍樹の別伝には、爾を改めて一と爲す。爾時の言は上を成すべからず。爾を改めて一と作せば、寧んぞ下に属さざらんや。⁽⁵⁾

と。これは、「一時」を上句の「如是我聞」につけるか、下句の「仏住……」につけるかという問題を取りあげたものである。前者の場合は「このように私が聞いたあるとき、仏は……」という意味になり、後者の場合は「このように私は聞いた。あるとき……」という意味になる。普通、漢訳仏典の理解としては、慧遠の説のように後者を採用して、何ら問題はないと思われるが、梵

文の *evam mayā śrutam ekasmin samaye……* 及びパーリ文の *evam me sutam ekam samayan……* の定型句の語学的な解釈にも二種類あり、それはちょうど慧遠の提起した問題と対応している⁽⁶⁾ので、興味を喚起させられたのである。慧遠は、「一時」を涅槃經にみられる「我於一時、在加尸国」「我於一時、在恒河岸」等の「於一時」と同じだと解釈し、さらに、引用文に示したように、『六十華嚴』の十地品の冒頭の「爾時、世尊、在他化自在天摩尼宝殿上、与大菩薩衆俱。」の「爾時」が龍樹の別伝（今、出典を明らかにできないが、鳩摩羅什訳『十住経』には「如是我聞。一時仏在在他化自在天王宮摩尼宝殿上、与大菩薩衆俱。」大正一〇・四九九下とある）では「一時」に書き改められていることを論拠としている。

③ 弟子品の「時我世尊、聞說是語、默然而止、不能加報。」について、

此の語は外國語の法に順ず。此に順すれば、応に「世尊我時、聞是默然、不能加報。」と言ふべし。⁽¹⁰⁾

と述べている。なお、慧遠は経文を短縮して引用する場合が多い。また、同じく弟子品の「時我世尊、実懷慚

愧、……」について、

文の顛倒なり。若し正すならば、応に「世尊、我時、実懷慚恥、得無謬聽。」と言ふべし。⁽¹²⁾

と、前と同様の指摘をしている。妥当であると思う。

④ 弟子品の「幾何阿那律、天眼所見。」について、これは乃ち外国人の語に順ず。此に順ずれば、応に「那律、天眼所見幾何。」と言ふべし。⁽¹⁴⁾

と述べている。妥当な指摘であると思う。

⑤ 弟子品の「但為仏出五濁惡世、現行斯法、度脫衆生。」について、

此の語は顛倒す。若し正すならば、応に「但仏出於五濁惡世、現行此法、為度衆生。」と言ふべし。⁽¹⁶⁾

と述べている。鳩摩羅什訳における「為」の意味は理解しにくい（だからこそ、慧遠の修正があったのである）が、慧遠が「為」を下に移したのは、漢文としてはやや破格であるが、「……するのは、衆生を救済するためである」の意に解釈したからであろう。

(二) 訓詁を示す

前述したように、慧遠は經典の一文字を取りあげて、

その訓詁を示している。その示し方は一定していないが、いくつかの形式に整理することができる。今、それらを適宜、分類して紹介することとする。上段に維摩經の本文を載せ、訓詁を示す文字に傍点を付し（下段も同様、また、大正藏經第十四卷の頁數、段落（上中下段をそれぞれa b cで示す）を記す。下段の訓詁には、大正藏經第三十八卷の頁數、段落を記す。

(ア) 「A謂B也」の形式

① 逮、無所得不起法忍（337 a）

逮、謂及也。（亦曰至也）
（428 c）

② 諸有所作、亦不唐捐（右同）

唐、謂虛。捐、謂棄（430 b）

③ 目淨修、広如青蓮（337 c）

修、謂長也（432 a）

④ 既見大聖以神變（右同）

既、謂已也（432 b）

⑤ 以、無心意無受行（右同。大正藏本は「以」を「已」に作るが、

慧遠は「以」として經文を標出し、それに訓詁を付している）

⑥ 我世尊、本為菩薩時、意豈不

豈、謂可也（438 a）

淨（338 c）

⑦ 久於仏道、心已純淑、決定大

乘（339 a）

⑧ 世尊大悲、寧不垂愍（339 c）

⑨ 無以穢食、置於宝器（540 c）

⑩ 世孰有真天眼者（541 b）

⑪ 釈梵四天王等、咸作是念（544 b）

b）

⑫ 又問、以何為空（544 c）

⑬ 無造、尽証修道之求（545 a）

⑭ 善不善執、為本（547 c）

⑮ 豈雜欲食、而聞法乎（552 a）

⑯ 不在方、不離方（555 a）

⑰ 日光出時、与冥合乎（555 b）

(イ) 「A猶B也」の形式

① 目淨修、広如青蓮（337 c）

② 既見大聖以神變（右同）

③ 淨心觀仏、靡不欣（右同）

④ 仏言、善哉（338 a）

純、謂精也（440 c）

寧、謂安也（445 a）

無、謂勿也（453 b）

孰、謂誰也（455 a）

咸、謂皆也（459 c）

又、謂更也（471 c）

造、謂作也（477 b）

孰、謂誰也（482 c）

豈、謂可也（499 c）

方、謂處也（511 a）

冥、謂闇也（512 b）

広、猶闊也（432 a）

以、猶用也（右同）

靡、猶無也（434 a）

善、猶好也（435 a）

⑤ 我世尊、本為菩薩時、意豈不

淨（338 c）

⑥ 久於仏道、心已純淑、決定大

乘（339 a）

⑦ 冥、坐樹下（339 c）

⑧ 法同法性、入諸法故（540 a）

⑨ 無以穢食、置於宝器（540 c）

⑩ 雖然、当承仏聖旨、詣彼問疾

（544 b）

⑪ 斯、諸菩薩大弟子衆（546 a）

⑫ 無造、尽証修道之求（右同）

⑬ 如第六陰、如第七情（547 b）

⑭ 仏化所生、非没、生也（548 c）

⑮ 無晦、無明（555 a）

⑯ 汝所得法、有没、生乎（右同）

⑰ 如汝所說。吾助爾喜（556 a）

意、猶心也（438 a）

淑、猶善也（440 c）

冥、猶默也（445 c）

入、猶順也（448 b）

以、猶用也（453 b）

然、猶爾（469 c）

斯、猶此也（477 a）

尽、猶滅也（477 b）

情、猶識也（481 a）

没、猶滅矣（485 b-c）

晦、猶闇也（510 c）

没、猶滅也（512 a）

爾、猶你也（513 c。大正藏本は「你」を「爾」に作るが、続藏本にしたが

- ① 衆經之上、入大悲悲 (55b)
 ② 如是輩經 (57a)
 ③ 不畏深義、如實能入 (右同)
 ④ ⑦の③と④の①、④の④と⑤の②、④の⑥と⑦の⑤、
 ④の⑦と⑥の⑥、④の⑧と⑨の⑧、④の⑩と⑪の⑩の訓
 詁は、それぞれ並列して記されている。つまり、一例を
 示すと、「修謂長也。広猶聞也。」となっていて、「謂」
 と「猶」は、本書においては、意味の相違はなく、修辭
 上の理由で使いわけているだけであると推定される。
 (ウ)「AはB義」の形式
- ① 唯願世尊、說諸菩薩淨土之行 (唯、是敬辭。) 亦是專義 (53a)
 ② 舍利弗言、唯然世尊 (53c)
 ③ 舍利弗言、唯然世尊 (右同)
 ④ 以、振慳貪、起檀波羅蜜 (53c)
 ⑤ 宴坐樹下 (53c)
 ⑥ 以、振慳貪、起檀波羅蜜 (53c)
 ⑦ 亦是用義 (47c)
- ① 德守菩薩曰 (55c)
 ② 善哉、善哉 (51c)
 (ウ) 説明するべき經典の文字を含む
 二字の熟語を作る形式
- ① 諦、瞻、諦、瞻 (53a)
 ② 善、思念之 (右同)
 ③ 世尊大慈、寧不垂愍 (53c)
 ④ 當直除滅、勿擾其心 (54b)
 ⑤ 是為魔來燒、固汝耳 (54a)
 ⑥ 是為魔來燒、固汝耳 (右同)
 ⑦ 雖然、當承仏聖旨、詣彼問疾 (54b)
 ⑧ 世尊慰愍、致問無量 (右同)
 ⑨ 斯諸菩薩、亦能勞謙 (53a)
 ⑩ 斯諸菩薩、亦能勞謙 (右同)
 ⑪ 非意所圖、非度所測 (53b)
 ⑫ 深發一切智心、而不忽忘 (54b)

- 入、猶順也 (55b)
 輩、猶等也 (57c)
 入、猶解矣 (58a)
 ④の③と④の①、④の④と⑤の②、④の⑥と⑦の⑤、
 ④の⑦と⑥の⑥、④の⑧と⑨の⑧、④の⑩と⑪の⑩の訓
 詁は、それぞれ並列して記されている。つまり、一例を
 示すと、「修謂長也。広猶聞也。」となっていて、「謂」
 と「猶」は、本書においては、意味の相違はなく、修辭
 上の理由で使いわけているだけであると推定される。
 (ウ)「AはB義」の形式
- ① 唯願世尊、說諸菩薩淨土之行 (唯、是敬辭。) 亦是專義 (53a)
 ② 舍利弗言、唯然世尊 (53c)
 ③ 舍利弗言、唯然世尊 (右同)
 ④ 以、振慳貪、起檀波羅蜜 (53c)
 ⑤ 宴坐樹下 (53c)
 ⑥ 以、振慳貪、起檀波羅蜜 (53c)
 ⑦ 亦是用義 (47c)
- ① 德守菩薩曰 (55c)
 ② 善哉、善哉 (51c)
 (ウ) 説明するべき經典の文字を含む
 二字の熟語を作る形式
- ① 諦、瞻、諦、瞻 (53a)
 ② 善、思念之 (右同)
 ③ 世尊大慈、寧不垂愍 (53c)
 ④ 當直除滅、勿擾其心 (54b)
 ⑤ 是為魔來燒、固汝耳 (54a)
 ⑥ 是為魔來燒、固汝耳 (右同)
 ⑦ 雖然、當承仏聖旨、詣彼問疾 (54b)
 ⑧ 世尊慰愍、致問無量 (右同)
 ⑨ 斯諸菩薩、亦能勞謙 (53a)
 ⑩ 斯諸菩薩、亦能勞謙 (右同)
 ⑪ 非意所圖、非度所測 (53b)
 ⑫ 深發一切智心、而不忽忘 (54b)

- ⑤ 又、無方便慧縛 (54b)
 ⑥ 唯、然世尊、願賜少法 (54b)
 ⑦ 唯、然世尊、願賜少法 (右同)
 (エ)「……辭」という形式で主として助辭を説明するもの
- ① 与、大比丘衆八千人俱 (57a)
 ② 唯、願世尊、說諸菩薩淨土之行 (唯、是敬辭。) 亦是專義 (53a)
 ③ 仏言、善哉 (右同)
 ④ 善哉、寶積。乃能為諸菩薩、問於如來淨土之行 (右同)
 ⑤ 日月豈不淨耶 (53c)
 ⑥ 舍利弗言、唯然世尊 (右同)
 ⑦ 唯、舍利弗 (53c)
 ⑧ 二比丘言、上智哉 (54b)
 ⑨ 答曰、直心是道場 (54c)
 ⑩ 如、舍利弗非女而現女身 (54c)
 如者是其指斥之辭 (48b)
- 又者更義 (47b)
 唯、是專義 (55c)
 然是可義 (右同)
 大者歎辭 (42a)
 唯、是敬辭 (43c)
 哉、是助辭 (43a)
 乃者是其希越之辭 (右同)
 耶者是其不定之辭 (43b)
 唯、是敬辭 (43a)
 唯、是敬辭 (44a)
 哉、是助辭 (47b)
 曰者給舉酬答之辭 (46b)
 如者是其指斥之辭 (48b)

- ⑬ 囉、累品 (57a)
 以上のほか、「又、謂更也。亦是重也。」(以下、維摩經の本文は引用しないが、經典の文字には傍点を付す)、「以、是為也。」(20)、「欺、是誑也。」(21)、「輩、猶等也。」(22)、「AはB也」の形式のものが見られる。また、「溢、是盈溢增長之謂」、「致、是運致担輦之謂」のような「AはB之謂」の形式のものがある。また、經典の一字を二字の熟語で解釈する例として、「非、一稱衆」、「始起名建、功德曰立」、「飲法稱受、溫守名持」、「表德名相、愜情稱好」、「一懸 (大正藏本の懸を脚注によって懸に改める) 厚曰深、難壞稱堅」、「愛憐名慈、惻愴曰悲、慶悅名喜、亡懷稱捨」、「言告稱謂」、「形曲名語、心虛曰偽」等がある。また、經典の一字を、少し詳しく説明する例として、「下、稟上力、名之為承」、「口陳文字、謂之為言、以言闡法、方名為說、亦可依法施語為言、以言闡法、号之為說」等がある。なお、これまでの分類に入らなかったが、「夫是語端」がある。

- (三) 經文中の助辭の使用の理由を文脈に即して明かす
- ① 一時仏在毘那離菴羅樹園
(537 a) 法身平等、実無栖託。示化有方。是故言在。(425 c)
 - ② 与大比丘衆八千人俱(右同)
約仏衆。以身兼彼、目之為与。(426 a)
 - ③ 深入縁起、断諸邪見(右同)
五見非一、説以為諸。(429 c)
 - ④ 隨諸衆生、応以何国、入仏智慧、而取仏土(538 a)
隨物所宜、故言応以。(435 b)
 - ⑤ 唯舍利弗(539 c)
唯是敬辭。舍利出家、維摩在俗。俗須敬道。是以言唯。(446 a)
 - ⑥ 雖然、当承仏聖旨詣彼問疾(544 b)
弁難兼易、竝以言雖。(459 c)
 - ⑦ 諸仏国土、亦復皆空(544 b-c)
土空似室。是以言亦。(461 c)
 - ⑧ 但以衆法、合成此身(545 a)
除前我相、無人唯法。是以言但。(473 c)
 - ⑨ 起唯法起、滅唯法滅(右遺衆生相、無生但(大正蔵

- (同) ⑩ 此法想者、亦是顛倒(右同)
倒義同前、故得言亦。(右同)
- ⑪ 唯有空病。空病亦空(右同)
空義同前。是以言亦。(474 a)
- ⑫ 又無方便慧縛(545 b)
又者更義。前約定論、更約慧説。是以言又。(475 b)
- ⑬ 設身有疾、而不永滅、是名方便(右同)
仮有非定。是以言設。(475 c)
- ⑭ 雖過魔行、而現降衆魔、是菩薩行(545 c)
弁寂兼有。是以言雖。下諸句中、雖義例然。(476 a)
- ⑮ 但於諸仏、生清淨心(554 a)
無穢唯淨、故説為但。(555 a)
- ⑯ 菩薩、雖信解深法、猶自毀傷、而不能得無生法忍(557 a-b)
弁得兼失。是以言雖。(558 a)

以上、(一)、(二)、(三)を通して、慧遠の注釈の特徴の語学的

側面に焦点をあてて考察してきた。資料の羅列になったが、これまで注意されなかった慧遠の注釈態度の一面が明らかになったと思う。

第二節 維摩經の分科

慧遠は、維摩經全体の構成について、処・会・義・文の四つの視点から論じている。第一の「処」(説法を行なう場所)と第二の「会」(説法を行なう集会)との論述を要約すると、維摩詰がその生涯において説法した処・会は無量であるが、この維摩經に記述されている今の一回の説法に関しては、二処三会であり、二処とは「菴羅樹園」と「維摩詰舎」のこと、三会とは「菴羅會」と「維摩室」と「重会菴羅」のことであるとされる。(36) ところ

で、この三会和品章との対応関係については、「如是我聞」の解釈の次下で、仏国品第一が第一会、菩薩行品第十一以下が第三会であることが明かされている。(37)

次に、第三の「義」については、此の經は宗として不思議解脱の義に帰す。此の不思議解脱の法は是れ法界の中の一門の義なり。門別一なり

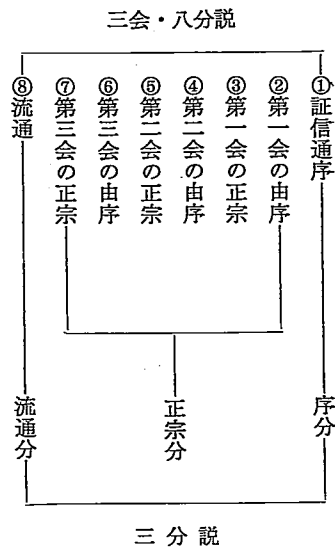
と雖も、妙旨虚融して、義統べざる無し。統べざる無きが故に一切諸法、悉く其の中に入る。撰する所の法は復た衆多なりと雖も、要するに唯だ二種のみ。一は是れ理法、二は是れ行法なり。(38) と、やや詳しい記述がある。維摩經の根本趣旨が不可思議解脱に帰着するとおさえたいうえで、その不可思議解脱は法界の中の一門の義であるけれども、その中にすべての法がおさまること、すべての法とは、理法と行法とに二分されることが明かされている。この理法と行法とについては、理法とは「真如」のことであり、行法とは一般的規定としては「因果」のことであり、維摩經の場合には、「法身・淨土の因」と「法身・淨土の果」を意味することが明かされている。(39)

三会和そこに説かれる行法との関係については、人多く亀判す。初めの二会は偏に如来淨土の因果を明かす。第三会の中には偏に如来法身の因果を明かす。(40) と述べている。これは、文中に言うように「亀判」であり、詳細に追求すると、三会を通じて法身と淨土との兩法を説いていると述べられているが、その具体的な經文

の指摘の説明はここでは割愛する。⁽⁴¹⁾

次に第四の「文」については、経文は細分すると八部分に分けられ、まとめると三分されるとする。はじめに八分されることについては、三會それぞれに序と正とがあつて六部分を構成し、さらに経初の「如是我聞」が經全体の「証信通序」となり、見阿闍世品第十二の「仏告舍利弗、汝見此妙喜世界及無動仏不。」以下が流通となるので、この二部分を加えて、都合、八部分となるのである。⁽⁴²⁾

次に、一經全体はまとめると三分されるということについて、三分とは、序、正宗、流通のこと、この三分科經は、經の根本思想である正宗をどのように規定するかによって、五つの解釈が可能であること、その中で、慧遠は第五の解釈を採択することが明かされている。⁽⁴³⁾ 順に説明しよう。流通分は五説いずれも同じである（前述した）から、正宗分のはじまる場所を指示すれば、自ずと序分の終わりのわかることとなる。第一説は、維摩詰の現在の説法（弟子品、菩薩品においては、維摩詰の過去の説法が回顧されている）を正宗分とする場合で、問疾品第五



そこで次に、三會それぞれにおける由序と正宗の区分について考察する。まず、初會（仏国品）における由序と正宗については、⁽⁵⁴⁾「就初會中、先序後正。序正不定、進退兩判。」とあつて、二説をあげている。⁽⁵⁵⁾ 第一説は、ただ如来の所説を正宗とする場合で、初めから宝積の偈が終わるまでが「序」で、それ以下が「正」である。第二説は、如来の所説ばかりでなく、如来の示現する神変不思議の徳も含めて正宗とする場合で、初めから「蔽於一切諸來大衆」までが「序」であり、それ以下、つまり宝積等が仏に蓋を奉獻してから後はすべて「正」である。献上された多くの蓋を、一つの蓋に合成して、遍く

の「善來文殊師利、不來相而來、不見相而見。」以下が正宗分とされる。第二説は、「昔來相伝、多依此判。」と言われ、維摩詰の一生にわたる説法を正宗とする場合で、方便品第二の「以其疾故、国王大臣、長者居士……無數千人、皆往問疾。」以下が正宗分とされる。第三説は、前二説と異なり、維摩詰のみでなく仏の説法も含めて正宗分とする場合で、仏国品における宝積の七言偈が終わつて後、宝積が仏に浄土の行を質問すること以下を正宗分とする。第四説は、第三説と異なり、仏と維摩詰の説法だけでなく、神通などを含む菩薩の不思議の徳を正宗分とする場合で、仏国品の「爾時毘耶離城、有長者子、名曰寶積。」以下が正宗分とされる。最後の第五説は、「三會に約対して經を別かち、以て三分を別かつ」場合で、既に述べた三會説と八分説を指し、「如是我聞」が序分で、「一時仏在毘耶離菴羅樹園」以下の三會が正宗分で、流通分は前と同じである。慧遠は、この五説を紹介した後に、第五説を採択して、「今即ち此の最後の二判に依りて科分解釈す」と述べている。以上の慧遠の説をまとめると次のように図示される。

三千大千世界を覆う如来の神通まで正宗に含む点に特色がある。實際、仏国品の随文解釈の中でも、両方の説が採用されている。⁽⁵⁷⁾

次に、第二會（方便品から香積仏品）における由序と正宗についても、二説があげられている。第一説は、維摩詰の現在の説法を正宗とする場合で、方便品から、問疾品の「唯置一床、以疾而臥。文殊師利、既入其舍、見其室空、無諸所有、独寝一床。」までが由序で、「時維摩詰言、善來文殊師利、不來相而來、不見相而來。」以下、香積仏品までが正宗である。⁽⁵⁸⁾ 慧遠は、この第一説を「此一序正、旧來共伝。」と論評した後、第二説を紹介している。それによれば、この説は、維摩詰の一生にわたる説法を正宗とする場合で、方便品の「其以方便、現身有疾。」までが由序で、「以其疾故、国王大臣……」以下がすべて正宗である。⁽⁵⁹⁾ これは、維摩の一生にわたる説法を正宗とする立場であるから、弟子品、菩薩品において、如来から維摩詰の病氣見舞いを勧められた声聞や菩薩が、往昔の維摩詰との出会いにおける維摩詰の説法を回顧して、見舞いに行くことを辞退するが、この中に

示される維摩詰の説法も正宗に含まれるのである。実際に、第二会の随文解釈を検討すると、両方の説が採用されている。⁽⁶⁵⁾

次に、第三会（菩薩行品から見阿闍世品の途中まで）に関しては、「就此会中、初明由序。衆坐定下、是其正宗。」とある。すなわち菩薩行品の「即皆受教、衆坐已定。」以下が正宗とされる。その随文解釈の部分にも、「上来由序、自下正宗。」とある。

最後に、流通分について一言、言及する。流通には勸学修行流通と付属伝教流通があり、前者は、見阿闍世品における舍利弗の勸学と、法供養品における天帝の勸学と如来の勸学であり、後者は囑累品に説かれる。⁽⁶⁶⁾

以上、慧遠の維摩經分科を紹介してきた。經文をどこで区切るかという形式的側面のみを考察にわたってしまつたが、三会および各品の思想内容上の分類については、いずれ稿を改めて検討したいと思う。

註

(1) 『維摩經義記』については、橋本考契「慧遠の維摩經

義記」(『印仏研』五一、昭和三十一年一月)がある。また、慧遠の『維摩經義記』の敦煌写本断片は四種ある。平井有慶「敦煌本・南北朝維摩經疏の系譜」(『印仏研』三一、昭和五十七年三月)参照。また、『注維摩』から慧遠の『維摩經義記』の間に成立した維摩疏の敦煌写本断片については、平井氏に次のような論稿がある。「敦煌本・南北朝維摩經疏と注維摩」(『大正大学綜合仏教研究所年報』第四号、昭和五十七年三月)、「敦煌本・『維摩經義記』」(前同・第五号、昭和五十八年三月)、「敦煌本・『維摩經義記』考」(『印仏研』三十二、昭和五十八年十二月)等。仏教の經疏の形式的特徴を考察するには、南北朝時代の敦煌写本を研究する必要があるが、今後の課題としたい。

(2) 大正三八・四二四上。文中の「道」は「道」に通じ、「道」には「猶言也」「語也」等の訓詁がある。

(3) 大正一六・八〇二下。ちなみに、慧遠は『温室經義記』(大正第三十九卷所収)を還述している。

(4) 『涅槃經義記』でも「如是我聞」について同様の解釈を与えているが、そこでは、温室經の引用は原文どおりである(大正三七・六一六上参照)。

(5) 大正三八・四二五中。文中、「云言」という同義字を重ねた熟語があるが、慧遠の文章の一つの特徴として、字数をそろえたり、偶数句をつくるため、このような熟語を作る傾向性が強い。「云言」は、四二五下にもみら

れる。その他の例としては、「道言」は、四四二下、四

五三上、四六一下、四九四上に出る。「善言」は、四二

五下、四三〇下、四七六中、四九五中に出る。「また」

の意味の「亦復」「又復」はさほど珍しくはないが、「又

亦」が、四二二中、四二八中(二回)、四三八中、四五

五下に出る。仏典の注釈書によく用いられる「約」「就」

「寄」「対」は、比較的自由に組みあわされる。「寄対」

は、四四〇上、四四一下、四七六上、四八三下(二回)

に出、「寄就」は、四二三上、四二四下、四四〇上、四

四二上、四六一上、四九八下、四九九上、五〇三中(五

回)に出、「寄約」は、四八三中、五一五中に出る。「就

約」は、四六六中一回出るのみであるが、「約就」に

いたっては、都合五十三回も出る。「約対」も比較的

多く三十数回出る。また、「仮約」という熟語が五〇一下

に一回だけ出る。また、「このようである」という意味

で、「事等如……」を使う(四二五中、下、四二八中、

四五八下、四七二中に出る)。また、「さきの」という

意味で、「向前」を使うことが多い(三三八回)。また、

「だれ」の意味で、「何誰」を使う(四六一下、四八九

下)。以上のほかにも、いくつかあるが、比較的珍しい

もの、もしくは、頻度の多いものをあげた。

(6) 中村元訳『ブッダ最後の旅』(岩波文庫)一八三―五

頁の訳注を参照。

(7) 大正三八・四二五中参照。

(8) 大正九・五四二上。

(9) 大正一四・五三九下

(10) 大正三八・四四六下

(11) 大正一四・五四二上

(12) 大正三八・四五九中―下

(13) 大正一四・五四一上

(14) 大正三八・四五六上

(15) 大正一四・五四二上

(16) 大正三八・四五九下

(17) 「亦可」は『維摩經義記』におよそ五十回ほど出る頻

出句で、一つの解釈を示したあとで、また別の解釈の可

能性を示すときに用いられている。たとえば、この例

では、「累は担累。法は伝者之重担、故名為担累。以此

囑付、令人伝通、故名囑累。就斯標品、名囑累品。亦可

累者、是其重累。如来殷勤、重累付囑、故云囑累。約斯

標品、名囑累品。」(前同・五一七中)とあるように、な

ぜ囑累品と名づけるかという問題について、はじめに累

を重い荷物に法と解釈して、その法を付囑するから囑累

品と名づけるという答えを与え、次にもう一つの答えが

可能であることを示すのに、冒頭に「亦可」を冠し、累

はくりかえすという意味と解して、仏がくりかえし付囑

するから囑累品と名づけるのであると述べている。この

「亦可」は、景明元年(西暦五〇〇年)の写記年号を有

する『維摩經義記』(スタイン本二一〇六番)にも、「空理、

能通十地行、到寂滅菩提、故名不二法門。亦可以生滅等法、為入不二法門。」(大正八五・三三六中)と見られるので、慧遠だけの特徵ではないが、このような注釈上の形式的特徴に注意して、南北朝期の敦煌写本を研究することも重要であろう。

- (18) 大正三八・四七一下
- (19) 前同・五一〇下
- (20) 前同・五一一中
- (21) 前同・五一七下
- (22) 前同・四九五中
- (23) 前同・四七一上
- (24) 前同・四二六中
- (25) 前同・四二七上
- (26) 前同
- (27) 前同・四二九上
- (28) 前同・四二九中
- (29) 前同・四三六中
- (30) 前同・四四六上、四九二下
- (31) 前同・四八七上
- (32) 前同・四六九下
- (33) 前同・四九八下
- (34) 前同・四四六上
- (35) 智顗と吉蔵の維摩經分科に関しては、拙稿「維摩經分科に関する智顗と吉蔵の比較」(『印仏研』三三一、近

- (42) 大正一四・五五五下
- (43) 「次第四門、就文分別。文中細分、有其八分。相從唯三。言其八者、三會之中、各有序正、則六分。經初如是我聞之言、是其一部証信通序。別以為一。仏告舍利汝見妙喜無動不下、明其一部流通之義。別以為一。通余說八。」(大正三八・四二三上) 参照。
- (44) このように、解釈の可能性をいくつか列挙したうえで、その中のどれがふさわしいかを明示することは、慧遠の注釈上の一つの特徴といえる。そのような例を、『維摩經義記』から検索すると、「今言大者、義當第三。」(前同・四二六中)、「今此所論、義當第二權巧方便。」(四三九下)、「今拋初門」(四四一中)、「此四重中、今拋後三。」(四四三下)、「今此所論、義當後門。」(四六二下)、「今此所論、義當第三。」(四六七中)、「雖有三義、第二正當。」(四七一上)、「雖具三義、正當第二。」(前同)、「今就第二」(四七七上)、「今拋後門」(四七九上)、「今此所論、義當後門。」(四八二下)、「今時所并、義當第三。」(四八六上)、「今此所論、義當後二。」(四八七下)、「今此所論、通則皆是。即文以求、偏就染淨對治門。」(四九三上)、「今此所論、義當前三。」(四九三中)、「今此所論、就初言耳。」(四九三下)、「今拋後門」(四九五上)、「今拋後義」(四九五中)、「今依後門」(四九六上)、「今此所論、義當(大正蔵の常を脚注によって当に改める)第三。」(四九六上)、「今此所論、約就真実緣起說。」(四九

刊) 参照。

- (36) 「言就處者、拋今一說次第以論、処別唯二。一菴羅樹園。二維摩詰舍。若通維摩二世所說、処別衆多。言就會者、拋今一說次第以論、會別有三。一菴羅會。二維摩室。三重會菴羅。若通維摩二世所說、會別無量。」(大正三八・四二二下) 参照。この三會については、すでに、維摩經の説者を明かすところで、「然此經中、三會差別。初會仏說。第二會是維摩說。第三會、是仏及維摩共說。」(前同・四二二下)と言及されていた。なお、五一八下にも類文がある。
- (37) 「下次明其三會別經。尽此品來、是期初會。方便品下、是第二會。菩薩行品下、是第三會。」(前同・四二四中) 参照。また、方便品の釈のはじめに、「從此已下、第二會說。」(前同・四三九下)とあり、香積仏品の釈の終わりに、「第二會竟」(前同・五〇三上)とあり、菩薩行品の釈のはじめに、「從此已下、第三會說。」(前同・五〇三上)とある。
- (38) 前同・四二二下
- (39) 「理謂真如。如隨詮異、門別種種。故下文、或時宣說如法性實際、以為理法。或說三空、或說二諦、或二無我、不二門等。行謂因果。因謂法身淨土之因、果謂法身淨土之果。」(前同・四二二下) 参照。
- (40) 前同
- (41) 前同・五二二下—五二三上参照。

- 七上)、「今就法論、等就法中、拋第三說。」(四九八上)、「今此所論、約就顯真。」(五一五中)、「今此所論、理法為義、義當初門。」(五一六上)、「第四拋深尋淺次第、如此中說。」(五一六中)、「今此所論、義當後門。」(五一六下)がある。
- (45) 大正三八・四二三上—中参照。
- (46) 大正一四・五四四四中
- (47) 大正三八・四二三上
- (48) 大正一四・五三九中
- (49) 前同・五三八上参照。
- (50) 前同・五三七中
- (51) 大正三八・四二三中
- (52) 大正一四・五三七上
- (53) 大正三八・四二三中
- (54) 前同・四二四下
- (55) 前同参照
- (56) 大正一四・五三七中
- (57) まず、「散於諸衆」の釈の次下で、「上來由序。自下約對不思議、悉為正宗。」(大正三八・四三一中)と述べて第二説の立場を採り、また、宝積の献蓋から偈の終わるまでの段落については、「初之一段、望前為正宗。望後仍有起發之義、故亦名序。由其蓋中現十方國、起後所說淨土因果、故得名序。」(前同)と述べて第一説を採用している。同じことは、偈の終わったところでも、「献蓋

至此、望前為正。望後仍有起発之義、故亦名序。」(前同・四三四下)とくり返される。

(58) 大正一四・五四四中

(59) 前同

(60) 「此会之中、有序有正。不定。進退有二。一唯取維摩現今一会所説之法、以為正宗。……後略……」(大正三八・四三九下) 参照。

(61) 前同・四四〇上

(62) 大正一四・五三九中

(63) 前同

(64) 「二通撰維摩一世所説、悉為正宗。是則從初乃至方便現身疾來、判為由序。以其疾故、国王大臣、皆往問下、悉為正宗。広集維摩一世所説、為正行法、令人学故。」(大正三八・四四〇上) 参照。

(65) まず、方便品の「其以方便、現身有疾。」の解釈の後、に、「上來由序。下為正宗。」(前同・四四一下)とあり、第二説が採用されている。また、問疾品の解釈のところでは、「自下第四、文殊往至、入舎見空。唯見維摩獨寢而臥。上來序竟。自下正説。」(前同・四六九下)とあり、第一説が採用されている。ただし、ここでも、次下に、「然序与正、進退不定。備如上弁……後略……」(前同)と、同じく二説が並挙されている。

(66) 前同・五〇三中

(67) 大正一四・五五三中

(68) 大正三八・五〇三下

(69) 「上來三會、別経已竟。仏告舍利汝見妙喜無動仏下、総明流通。流通有二。一是勸(大正蔵の觀を脚注によつて勸に改める)学修行流通。二囑累下、明其付属伝教流通。……中略……前勸学中、随人分三。一舎利勸学。二法供品初、天帝勸学、三法供品後、如来勸学。」(前同・五一二下―五一三上) 参照。また、法供養品の釈には、「法供品者、下明天帝如来勸学。……中略……就此品中、初明天帝勸学流通。二此経広説過去未來現在仏下、明如来勸学。」(前同・五一三上―中)とあり、囑累品の釈の冒頭には、「上來広明勸学流通。自下明其付属流通。」(前同・五一七中)とある。

(かんのひろし・日本學術振興會奨励研究員)